

羽用水の取水地点付近の様子――

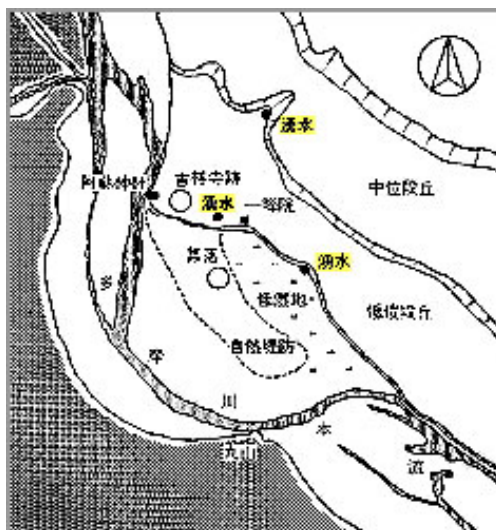
羽用水は小作取水堰の少し下流から自然流入で取水した農業用水です。取水後、多摩川に沿って流れる用水の途中には、羽村市の埋蔵文化財の一つでもある精進バケ付近を通ります。精進バケは1988年（昭和63）に発掘された縄文時代中期（約4500年～3500年前）の集落遺跡で、ここで39軒の竪穴式住居跡に調理施設と見られる集積土杭や貯蔵施設のような土杭、それらと併せて縄文土器・石器も大量に見つかりました。この集落は直径100m前後の環状集落で、多摩川流域の縄文中期における拠点集落の一つであったと推定されます。



精進バケ付近を流れる
用水

羽村の稲作の歴史――

小作取水堰から多摩川沿いを下流に進むと、羽村市内
ねがらみ
唯一の水田根 搦前水田が見えてきます。羽村市域から縄文時代の遺跡は発見されましたが、弥生時代の遺跡は見つかっていません。その理由として治水や灌漑の技術が未発達時代に多摩川河川の中・上流域では水田を作ることができなかったからではないかと考えられています。しかし弥生時代の次に訪れる古墳時代の終わり頃には、羽村に人が住んだ形跡が見つかりました。1956年（昭和31）頃、水田から羽村市羽加美4丁目付近の根搦前
はいけい
遺跡から小型壺形土器、坏形土器[*1]、土製支脚[*2]が出
かまど
土したのです。これによって竈を使って食べ物を煮炊きしていた、つまりこの辺りに住居があったと推測することができます。



古墳時代の根搦前遺跡周辺地形図

上の地形図のように、根搦地区は最も低位の沖積段丘[*3]が二段に分化し、各段丘崖には湧水地が存在します。根搦前遺跡は多摩川がカーブしている内側にあり川面より高い位置にあることを踏まえ、現在水田があるこの場所は、古墳時代後期に既に段丘崖湧水を利用した水田が開かれていたと思われます。このような段丘崖湧水地前の水田は過湿田で土壤の保水性には優れているので、少量の水の供給でも稲作が比較的容易であったことが見て取れます。土壤の特徴から根搦前水田は「ウタリッ田[*4]」と呼ばれています。

また、江戸時代初期の1667年（寛文7）頃の検地帳によると羽村の農地のうち水田が占める割合は2パーセント程度でその全てが根搦前にあったそうです。水田に適した土地がほとんどなかった羽村は、人々が多摩川河川敷の「根搦前」を水田地として開発したことによって今日の規模にまで拡大されました。

水田の休閑期ー・ー・ー・ー・ー・ー

このような歴史を持つ根搦前水田は羽加美・羽中に位置し、羽用水が灌漑している農地の中ではその広さが23,000平方メートルと広大です。稲作に利用された水田は、休閑期には水田ならではの利用方法で姿を一変します。4月の中旬から下旬には360,000球のチューリップが満開になり、7月下旬から8月上旬にかけては^{おおが}大賀ハスが^{おおが}大輪の花を咲かせます。



根搦前水田

11月～5月の間は稲作利用を終えた水田にチューリップの栽培を行います。春に咲く色とりどりのチューリップは、関東でも最大級のチューリップ畑として注目されています。夏には水田の一部に大賀ハスが咲きます。大賀ハスは約2,000年前の縄文時代に咲いていたハスの実の種から発芽・開花させた古代ハスです。このハスの名前は故・大賀一郎博士（当時関東学院大学教授）が1951年（昭和26）千葉県検見川の遺跡で縄文時代の古代ハスの種を3粒発見し、そのうちの1粒の開花を成功させたことから由来しています。大賀ハスの開花時間は短く、早朝に開花するとわずか数時間で花を閉じてしまいます。花の色は鮮やかなピンク色をしていて花径は240～280mmの大輪で、背丈は高いもので170cm以上にもなります。

また羽中は、『大菩薩峠』の作者である^{なかざとかいざん}中里介山の生誕の地としても知られています。

多摩川沿いに建つ阿蘇神社ー・ー・ー・ー・ー

多摩川沿い（根搦前水田より上流）の少し高い位置に建てられた阿蘇神社は、600年頃に推古天皇によって創建されたと伝えられている羽^{かんじょう}村市内で最も古い神社です。また平将門により勸^{かんじょう}請[*5]され、将門を討った藤原秀郷が将門の霊を鎮めるために阿蘇神社を再建し、境内にシイの木を植えたと伝えられています。このシイの木も東京都指定天然記念物に指定されています。祭神は九州の阿蘇神社と同じく建^{たけいわたつのみこと}磐龍命^{あそつひめのみこと}、阿蘇都媛命の他に10神が祭られています。東京都指定有形文化財にも指定されている本殿が鎮座する境内からは多摩川がすぐ脇に望めます。



阿蘇神社・本殿

羽用水周辺の環境ー・ー・ー・ー・ー

前出の他にも羽用水周辺には自然豊かな環境と文化財が多く残っています。根搦前水田の用水路近傍は、ホタルの生息地になっていて夏にはホタルの鑑賞会が開催されます。また、流路を少し離れた場所には、江戸時代末期に建立された^{いっぼういん}一峰院があります。この寺の鐘楼門は宮大工の小林藤馬[*6]によって手掛けられたもので、市の指定有形文化財にも指定されています。境内には湧き水があり、かつてはこの地域の人々の生活用水に利用されていたそうです。



一峰院・鐘楼門

羽用水の延長は比較的短く、取水地点から羽村市南西部の農地を約1kmほど灌漑すると、途中で余吐水を返しながら羽村市水上公園側的那賀樋管から多摩川に戻ります。

*1 坏形土器（はいけいどぎ）

．．． 杯のような形状をした、食べ物などを盛るための用具。

*2 土製支脚（どせいしきやく）

．．． 煮炊きをする際に火にかけた土器を支える役割をする土製の用具。

*3 沖積段丘（ちゅうせきだんきゅう）

．．． 流水によって土砂が積み重なってできた海岸や川沿いの平らな面（段丘面）と急な崖（段丘崖）から形成された階段状の地形。

*4 ウタリッ田（うたりった）

．．． 水はけが悪くいつも湿っていて乾かない水田のこと。または多摩地方の方言で「水田」のこと。

*5 勧請（かんじょう）

．．． 分霊（本社祭神を他所でも祀る際にその神の神霊を分ちたもの）を他の神社に移して鎮祭すること。

*6 小林藤馬（こばやしとうま）

．．． 江戸時代後期に活躍した旧木野下村（現青梅市）出身の宮大工。作品は大胆かつ繊細な彫刻が特徴。藤馬の手掛けた建造物は他に羽村市内の稲荷神社本殿・五ノ神社本殿・松本神社本殿等がある。